

学習者の素朴な疑問に答えるための基礎知識

久保野 雅史

1. 小学校高学年から英語教育

小学校5、6年生に外国語活動が導入されたのは2011年度のことである。英語という科目ではないが、「聞く」「話す」ことを中心としたコミュニケーション能力の素地を養うことを目指した活動型の授業が、学級担任の手によって週に1時間行われることになった。

それから5年が経過した。中央教育審議会教育課程部会は、次期学習指導要領の改訂方針について審議を続けて来たが、2016年8月26日に「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」を公表し、学習指導要領改訂の方向性(案)を明示した。そこでは、小学校での外国語教育の教科化が正式に提案され、2020年度からは、活動型の授業(週1時間)は2年前倒しされて中学年(3、4年)に行われることになり、高学年(5、6年)では教科型の授業(週2時間)が導入され、「読む」「書く」ことについての態度の育成も含めた、コミュニケーション能力の基礎を養うことになった。また、教科として系統的に学習する必要があるため、学級担任の専門性を高めることに加えて専科指導を行う教員を活用することも提案されている。(資料参照)

読み書きの指導には必然的に文字の指導が伴う。また、初歩的な文法の指導も不可避となるだろう。入門期の学習者を担当する教員にとって、今後さらに必要となる専門性とは何であろうか？

初めて学ぶ外国語は、不思議に満ちあふれている。学習者が抱く素朴な疑問を取り上げ、適切に答えるには、どのような知識が必要なのか？また、どのような態度で臨めば良いのか？大切なのは、「理解させる方便としての嘘は基本的につかない」ということである。最初に誤った思い込みを与えてしまうと、言語学習の芽を摘んでしまうことにもなりかねないので、言語事実に誠実に寄り添う姿勢が重要である。そのためには、英語学や英語史の知識が不可欠である。その上で、学習者の分かる言葉で語ることを工夫するのである。

以下本稿では、筆者が中学生を指導していた頃に出会った典型的な疑問への対応方法の具体例を、＜学習者からの質問とそれに対する回答＞という形式で、紹介していきたい。

2. 文字に関する疑問

2.1. 大文字と小文字

＜質問1＞ アルファベットに大文字と小文字があるのはどうしてですか？日本語にも小さく書く「っ」や「ょ」がありますが、それとは違うようですが…。

＜回答1＞ 日本語で「きょうは雨がふった。」という場合の「ょ」と「っ」は普通の大きさと書いた「よ」「つ」とは違った音を表します。「きょう」と「きょう」、「ふった」と「ふった」で

は表す音が違ってしまいます。日本語では文字を小さくするとこのように音が変わります。しかし、英語の小文字は大文字と異なった音を表すわけではありません。それでは、どうして大文字と小文字という2種類の文字があるのでしょうか。

小文字は大文字から生まれたものです。最初は大文字しかありませんでした。大文字から小文字ができる過程は、漢字を崩して書いた文字からひらがなが生まれたのと、ある意味では似ています。

今から2000年以上前の古代ローマ帝国の時代には、まだ小文字はありませんでした。当時のローマ人達は、文字を石に刻みつけたり、羊皮紙(羊の皮をなめした紙のようなもの)に書いたりしていました。その頃は、大文字だけで特に不都合はありませんでした。しかし次第に素早くたくさん書くことが要求されるようになりました。その結果、文字は書きやすいように徐々に崩れて丸くなっていきました。これが小文字の始まりです。ところが、問題が起きました。それぞれが勝手な崩し方をしたために、解読することが難しくなってしまったのです。

その問題を解決したのが、フランク王国のカルル大帝(Charles, the Great 742-814)です。彼が命令を出したおかげで、文字の崩し方は統一されました。これが現在使われている小文字の原形です。(ただし、8世紀の時点ではアルファベットは23文字で、j, u, wはありませんでした。uとvの区別はありませんでしたし、wはvを二つ続けて表していました。ですからwはdouble 'u'と読まれているのです。)

それぞれの文字がどのようにして大文字から小文字に変化して行ったのか、その歴史を見てみることにしましょう。

①大文字がそのままの形で小さくなったもの

$C, O, S, V, W, X, Z \rightarrow c, o, s, v, w, x, z$

②大文字のごく一部が変化したもの。

$I, J, K, P, U, Y \rightarrow i, j, k, p, u, y$

③大文字の一部が省略されたもの。

$B, L \rightarrow b, l$

④大文字の一部がつながったりしたもの。

$F, H, T \rightarrow f, h, t$

⑤大文字の角が取れて形が変わったもの。

A, D, E, G, M, N, R, Q

$\rightarrow a, d, e, g, m, n, r, q$

2.2. 文字の出現頻度

<質問2> 英語のアルファベットでよく使われる文字は何ですか? また、あまり使われない文字は何ですか?

<回答2.1> 『踊る人形』(*The Dancing Men*) という短編小説を読んだことがありますか? この短編は『シャーロック・ホームズの生還』(*The Return of Sherlock Holmes*) に収められています。書かれたのは今から約100年以上前で、イギリス人の作家コナン・ドイル (*Arthur Conan Doyle*) の代表作のひとつです。

『踊る人形』では名探偵ホームズが暗号の解読を行います。その暗号は人形が踊っているような形の絵文字です。



この暗号を解読する過程で、ホームズは次のように述べています。

ご存じのようにEは英語のアルファベットのなかでいちばんよく出てくる字で、現れる率がきわめて高く、みじかい文の中にはいちばん数多く見つかるものと見こんでいいのだ。最初の

通信に記号が15書いてあるうちで、おなじものが四つあったのだから、これを**E**と考えるのは妥当なことだ。

いちばんよく使われるの文字は**e**のようです。それでは**e**の次に多く出てくる文字は何でしょうか？ホームズは説明を続けます。

大ざっぱに言えば、**T, A, O, I, N, S, H, R, D, L**という順で多く出てくる。しかし、**T, A, O, I**はほとんど互角なのだ（以下省略）

ホームズの説明を整理してみましょう。

- ①もっともよく使われる文字は、**e**である。
- ②次によく使われる文字は、**t, a, o, i**である。
- ③その後は、**n, s, h, r, d, l**の順になる。

「よく使われる文字」に関してはここまでにして、次の質問に行きましょう。今までの話とは反対に「あまり使われない文字」は何なのでしょう？この話題は残念ながら『踊る人形』には出てきません。そこで、アメリカの子ども用に書かれた辞書*The Sesame Street Dictionary*を調べてみました。収録語数は約1,300語です。**A**から**Z**までのアルファベット26文字のそれぞれで始まる単語が50語ずつだとするとちょうど1300語になります。50語というのは、 $1300 \div 26 = 50$ という計算式から割り出した平均ですから、50語よりも多い文字や、少ない文字があって当然です。

平均と比べて極端に少ない文字が二つあります。**x**と**z**で始まる単語が極端に少ないのです。**x**で始まるのは、*x-ray*（エックス線）、*xylophone*（木琴）の2語だけで、**z**で始まるのは*zebra*（シマウマ）、*zipper*（チャック）、*zoo*（動物園）の3語だけです。平均の10分の1以下です。もちろん、**x**や**z**は単語の途中や最後まで使われますから、これよりも出現頻度が少ない文字があるかも知れません。しかし、ある程度の傾

向は分かると思います。少なくとも、

- ④**x**や**z**で始まる単語は、他と比べて極端に少ない。

ということだけは言えるでしょう。

<回答2.2> インターネットで*frequency of letters*（文字の頻度）をキーワードに検索してみました。すると、イギリスのオックスフォード（*Oxford*）大学出版局が作った*AskOxford*というホームページにたどり着くことができました。そこでは1995年に出版された*Concise Oxford Dictionary*（通称**COD**）を分析したデータが出ています。それによると、最も使われることが少ない文字は**Q**だということが分かりました。文字**Q**が使われる頻度を1として他の文字がどのくらいよく使われるかが一覧表になっています。（頻度の数値は少数第1位で四捨五入してあります。）

1位 E (56.9)	16位 G (12.7)
2位 A (43.3)	17位 B (10.6)
3位 R (38.6)	18位 F (9.2)
4位 I (38.4)	19位 Y (9.1)
5位 O (36.5)	20位 W (6.6)
6位 T (35.4)	21位 K (5.6)
7位 N (33.9)	22位 V (5.1)
8位 S (29.2)	23位 X (1.5)
9位 L (28.0)	24位 Z (1.4)
10位 C (23.1)	25位 J (1.0)
11位 U (18.5)	26位 Q
12位 D (17.2)	
13位 P (16.1)	
14位 M (15.4)	
15位 H (15.3)	

最も良く使う文字**E**の使用頻度は、最下位**Q**の60倍近くだと言うことが分かります。また、全体を100としたときの**E**の使用率は11.2%（出

現頻度は9文字に1回)です。一方でQの使用率は0.2% (出現頻度は500文字に1回)に過ぎません。

このような文字の使用頻度はSamuel Morse (1791-1872)がモールス信号(Morse code)を考案する際の基本になったとされています。文字の頻度は暗号作りにも応用されているのです。

3. 語形変化に関する疑問

3.1. 名詞語尾の-s

<質問3> 日本人がジャンケンをするような場面で、英米人が硬貨を投げ上げて「表か裏か」で決めるのを見たことがあります。そのときには*Heads or tails?*と言うらしいのですが、1枚のコインを使って裏表を出すのに、どうして複数形を使うのでしょうか?

<回答3> ここでの*heads, tails*は複数形ではありません。それでは、どうして-sが付いているのでしょうか?

まず、①を見てください。

① *If you toss a coin and it comes down heads, you can see the side of the coin which has a picture of a head on it.*

(硬貨を投げ上げ、表が上になって落ちてくるとしたら、(人物などの)頭部が刻まれた面が見えることになる。)

ここでは、*heads*が「表が上になって、表が出て」という意味の副詞として使われています。そのため、辞書の中には「頭部」という名詞とは別項目として独立させて、②のように説明しているものもあります。

② *heads* [形・副] (投げ上げたコインの)
表が出て

このように、<名詞+-s>という語形が副詞として使われる例は③に挙げる通りです。

③時 間：*always, sometimes, nowadays*

空 間：*backwards, forwards,
homewards, upstairs*

その他：*besides*

現代の英米人にとっては、③は<複数形名詞の副詞的用法>のように感じられるかも知れません。しかし、③の-sは<複数形の語尾>ではなくて、古い時代の英語の、名詞の属格の名残なのです。属格は、現代英語でいう<所有格>や<of+名詞>に相当する働きを持っていました。そして、古英語(OE = Old English)の時代には、名詞・代名詞の属格が副詞的に使われることがありました。ですから、③のように古英語に起源をもつ現代英語の副詞を副詞的属格(*adverbial genitive*)と呼ぶことがあるのです。

*Heads or tails?*で語尾に-sが付くのは、名詞の意味を副詞的に変化させるための格変化だったのです。④の<主語+動詞>を省略してできたものと考えれば分かるのでしょうか。

④ *Will it come down heads or tails?*

(表が上になって落ちてくるか、それとも裏が上になって落ちてくるか?)

ところで、硬貨の表はどのように*head*と呼ばれるのでしょうか?これは、硬貨の表面には女王などの頭部が刻まれていることに由来します。しかし、硬貨の裏面が*tail*と呼ばれるのは、裏面に尻尾が刻まれていたからではありません。単純に*head*の反意語が*tail*であるからなのです。

3.2. haveの三人称単数現在形

<質問4> 動詞の三人称単数現在(三単現)

の形はみな、*like*→*likes*、*wish*→*wishes*のように、語尾に*-s*か*-es*がつきます。それなのに、どうして*have*は*haves*とならずに*has*なのでしょうか？

<回答4> *haves*という綴りは、昔ならば正しい英語と言えます。13世紀頃までは、他の動詞と同じように語尾に*-s*を付けた*haves*のような形（当時の綴りは正確には*havs*）が使われていたからです。しかし14～15世紀頃になると、*-vs*、*-vd*のような語尾を持つ単語の一部で「*v*が脱落する」という現象が起きました。そのために、

① *havs* → *has*

② *havde* → *hade* → *had*

のような変化が起こり、現在使われている*has*、*had*という形になったのです。②の*hade*の語尾の*e*は、最初は発音していましたが、次第に発音されなくなったためにこちらも脱落し、現在の綴りになったのです。「*v*の脱落」が起きた単語には他に、*head*、*lady*などがあります。現在の綴りで*d*となっている部分は、かつては*vd*だったのです。

ところで、主語が三人称単数の時に限って動詞の現在形が変化するのはどうしてなのでしょう？一人称・二人称の語尾は昔から変化していなかったのでしょうか？そうではありません。10世紀頃の英語では、現在形は③のように四つの語尾変化を持っていました。

③	一人称	<i>-e</i>
	単数形	二人称 <i>-(e)st</i>
		三人称 <i>-(e)th</i>
	複数形	<i>-ath</i>

しかし、イングランド北部では三人称に*-s*を使うようになり、それがだんだん南部に広がり、16世紀後半には現在と同じように*-s*を付

けるようになりました。その後、三人称以外の語尾はすべて廃れてしまいました。それにもかかわらず、三人称だけがなぜか現在に生き残っているのです。「三単現の*-s*」は昔の英語の名残りだと言ってよいでしょう。

3.3. 「～の」と所有格

<質問5> テキストに*Please put your bag in my bike's basket.*という文が出ていました。「無生物は所有格にならない」と習ったのですが、*Please put your bag in the basket of my bike.*の方が正しいのではないのでしょうか？

<回答5> 「AのB」という内容を英語で表現する場合に、

① Aが生物である場合

→所有格(A's)を使ってA's Bと言う
Mary's brother, my father's car,
the cat's ear

② Aが生物でない(＝無生物)の場合

→所有格は使わずに*the B of A*と言う
the name of the street,
the roof of the house

の二通りのパターンを使い分ける必要がある、と教えることがあります。この使い分けは、原則として間違いではありません。

例えば「父の自動車」の場合に、②のパターンを使って*the car of my father* (×)と言うことはできません。ただしAの名詞が非常に長い場合は、*the husband of the woman who sent you that strange letter* (あの変な手紙を君に送った女性の夫) となりますが、このような場合は例外的なケースだと考えてよいでしょう。

さて「わたしの自転車のかご」の場合、*my bike*は無生物なので「パターン①は使えない」

となりそうですね。しかし、③は英語として全く問題のない文です。

③ *Please put your bag in my bike's basket.*
 <パターン① : *A's B*>

もちろん、④のように、

④ *Please put your bag in the basket of my bike.* <パターン② : *the B of A*>

と言うことも可能でしょう。しかし、英語としては④よりも③の方が自然に響きます。③のように、

⑤ *A*が無生物であっても<*A's B*のパターン>を使う

のはどうしてなのでしょう。これは、⑥のように<*A*が*B*を持っている>という意味関係から発展したと感じられるからです。

⑥ *Mary's brother*
 ← *Mary has a brother.*

これと同じように、*A*が無生物であっても、それを擬人化することによって、

⑦ *my bike's basket*
 ← *My bike has a basket.*

のように表現することが可能となるのです。⑧の例も「*A*の擬人化」と考えれば、合点がいくのではないのでしょうか？

⑧ <国・地域> *Scotland's climate,*
Europe's future; London's theaters
 <組織・機関> *the school's history,*
the government's decision
 <その他> *the ship's doctor,*

the game's rules, the bottle's mouth

もちろん、⑧の大部分は、⑨のように<*A's B*>と<*the B of A*>の両方が可能です。

⑨ *the train's arrival / the arrival of the train* (その列車の到着)
the plan's importance / the importance of the plan (その計画の重要性)
the earth's gravity / the gravity of the earth (地球の重力)

しかし、新聞の英語などでは<*A's B*>の方が優勢になりつつあります。限られた紙面に多くの情報を盛り込むために、より少ない語数で表現できる方を好むからなのでしょう。<*A's B*>を多用する傾向は、次第に拡大する傾向にあるのです。

4. and / orの使い分けに関する疑問

<質問6> *In the U.S., people don't share bathwater or sleep on the floor.* (アメリカでは、お風呂のお湯をいっしょに使ったり、ゆかに寝たりしません。)という文がありました。どうして*and*でなく*or*を使うのでしょうか？

<回答6> *or*が使われているのは、否定文からです。「*A*も*B*も〜でない」のように、*A*と*B*の両方を否定する文では、①のように*or*しか使えません。

① *not ~ A or B* … ○
not ~ A and B … ×

share bathwater (お風呂のお湯をいっしょに使う)と*sleep on the floor* (ゆかに寝る)の両方を否定しているので、*and*ではなく*or*が使われているのです。

しかし、肯定文では、②のように*and*が使わ

れます。

② *In Japan, we share bathwater and sleep on the floor.*

(日本では、お風呂のお湯をいっしょに使ったり、ゆかに寝たりします。)

日本語の場合、下線部の表現は肯定文でも否定文でも変わりありません。そのため、*and* を使っても良さそうに思えます。どうして *or* でなければならないのでしょうか？

単純な例文を使って、*or* が使われる理由を考えてみましょう。たとえば「雅史は、テニスもサッカーもします」と英語で言うときには、

③ *Masashi plays tennis and soccer*

のように *and* を使います。しかし「敦史は、テニスもサッカーもしません」と否定する文では、

④ *Atsushi doesn't play tennis or soccer.*

となり、**Atsushi doesn't play tennis and soccer.* と言うことはできません。

このような使い分けの理由は、次のような仕組みになっています。クラスで「テニスやサッカーをするかどうか」を調べるとします。まず「テニスをする人」を挙手で調べると、

⑤ 挙手した人 → *I play tennis.*

挙手しなかった人 → *I don't play tennis.*

にクラスは分かれます。同じように「サッカーをするかどうか」を調べると、

⑥ 挙手した人 → *I play soccer.*

挙手しなかった人 → *I don't play soccer.*

に別れます。③の雅史は、⑤と⑥の両方 (*tennis and soccer*) に挙手することになります。

いっぽう、④の敦史は、⑤に手を挙げませんし、⑥にも手を挙げません。

別の言い方をすると、敦史は、

⑦ テニスかサッカーのどちらか一方 (*tennis or soccer*) でよいから、する人

と言われても、挙手しないことになります。これが、*not* ~ *tennis or soccer* となる理由です。

「AとBのどちらも～ない」というのは「AとBのどちらか一方であっても～ない」という意味を表しているからです。これが、否定文の *not* の後ろでは *or* が使われる理由なのです。数学の授業で習った、集合のベン図 (*Venn diagram*) を思い出してみてください。

ところで、否定文では絶対に *and* を使うことができないのでしょうか？実は、場合によっては可能なのです。次の例では、飲酒と運転の両方を行うことを否定しています。

⑧ *Don't drink and drive.* (酒を飲んで運転してはいけない。→ 飲酒運転はいけない。)

もし、*Don't drink or drive.* と言うと、この場合は「酒を飲むだけでもダメ、運転するだけでもダメ」ということになり、⑧とは全然違う意味を表すことになってしまいます。

5. 教員養成の改善に向けて

本稿で述べてきた基礎知識は、教員免許状取得に必修である「英語学」分野の知識が中心である。しかし、多くの大学で教えられている英語学の内容は、学習者とりわけ初学者の抱く疑問に答えるようなものとは乖離する傾向にあるのが現実であろう。

文部科学省は、教員養成カリキュラムの質の担保を目指して「コア・カリキュラム」の検討を東京学芸大学に委ねている。この内容を現実

的なものにしていかなければならない。

加えて、小学校の現職教員に英語教員免許を取らせるための認定講習も始まりつつある。この内容を、小学校教員と小学生にとって実りあるような現実的なものとするこも、喫緊の課題である。これについては、神奈川大学でも2017年度からの導入が詰めの段階に入っているの、別の機会に詳しく報告したい。

Collins.

The Sesame Street Dictionary, Random House / Children's Television Workshop Writing: Plain & Fancy, Walt Disney Educational Media Company

AskOxford, <http://www.askoxford.com>

[参考文献]

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社
荒木一雄・安井稔編 (1992) 『現代英文法辞典』 三省堂
コナン・ドイル (阿部知二訳) 『シャーロック・ホームズの生還』 創元推理文庫
[Arthur Conan Doyle (1905) *The Return of Sherlock Holmes*]
セアラ・フラナリー／デイヴィッド・フラナリー著 (亀井よし子訳) 『16歳のセアラが挑んだ世界最強の暗号』 NHK出版
岸田隆之・早坂信・奥村直史 (2002) 『歴史から読み解く英語の謎』 教育出版
児馬修 (1996) 『ファンダメンタル英語史』 ひつじ書房
太田朗 (1980) 『否定の意味 — 意味論序説』 大修館書店
Swan, Michael (1984) Basic English Usage, Oxford University Press.
Swan, Michael (2005) Practical English Usage (3rd Edition), Oxford University Press.
安井泉 (2010) 『ことばから文化へ — 文化がことばの中で息を潜めている —』 開拓社

『ビスタ英和辞典』 三省堂書店

『リーダーズ英和辞典』 研究社

Collins COBUILD Learner's Dictionary,

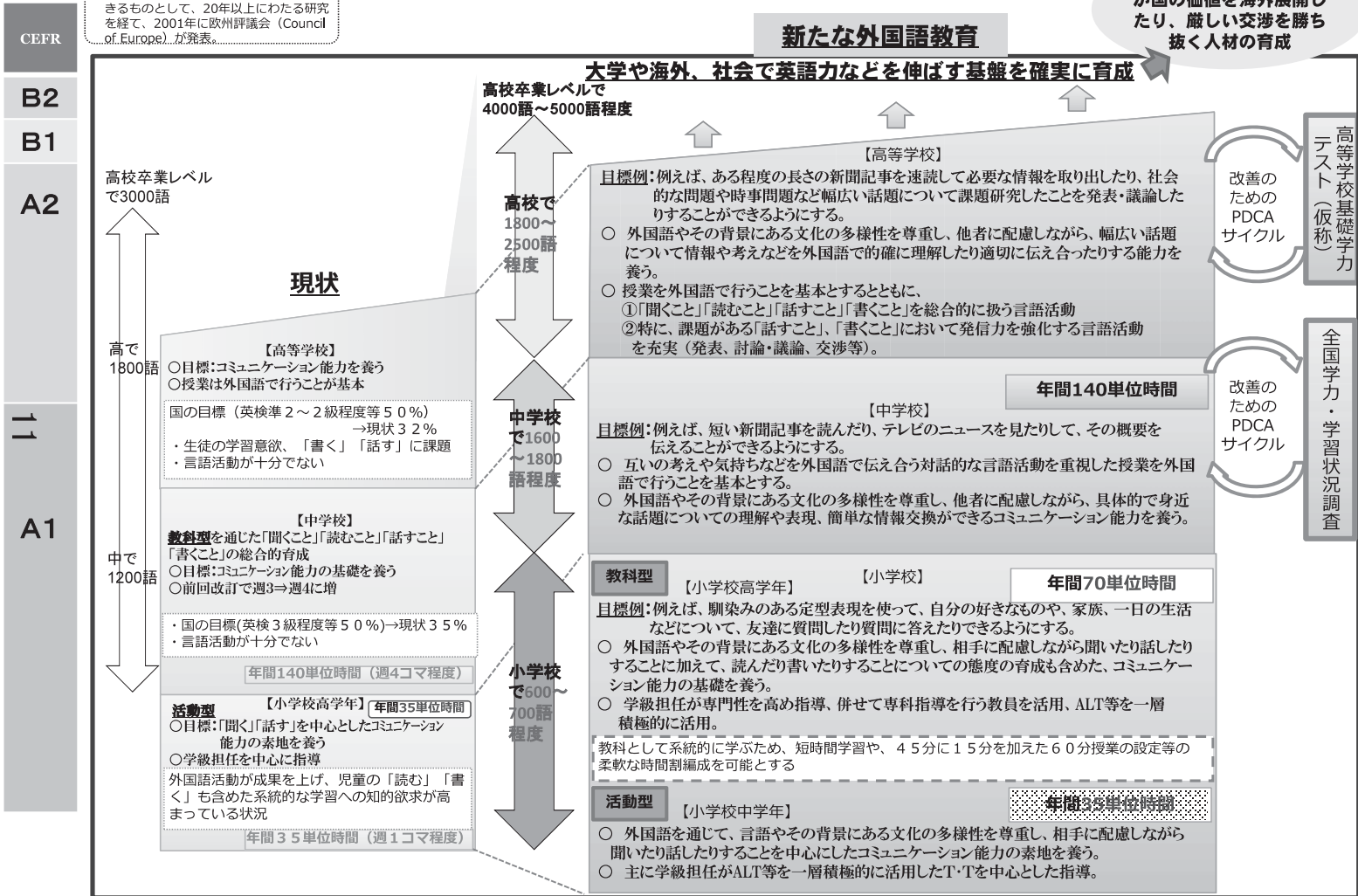
※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会 (Council of Europe) が発表。

外国語教育の抜本的強化のイメージ

新たな外国語教育

成熟社会にふさわしい我が国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成

大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基礎を確実に育成



学習者の素朴な疑問に答えるための基礎知識